

# 被服の変遷に関する考察

## その1 古代の服飾 原始の生活様式

古元千鶴子

### 序 説

私達の先祖の最初の生活様式はどのようなものであったかという疑問は人々が自己の生活を回顧するとき、ふと浮ぶことであろう。

わが国においては、これらの事は長い間神代の事実として伝承されていた。しかしこの神秘のベールも考古学人類学等の研究によって日本人も諸民族と同じく自然採集の生活から、計画的な農耕生活へと発展してきた事が明らかとなった。ことに太平洋戦争終結後は、神話や古代史に対する科学的研究が行われ、その成果も相ついであがっている現状である。被服史の研究は表面上の様式や形式の変化変遷のみを取り扱うことが主眼ではない。又衣服の有職故実のみを説くのは、その中心から遠く離れるもので、被服の形態の変化及びその推移は被服史の研究にとって一つの大きい分野であり主要な現象であるが、その服飾は一時代一社会に常に表われ盛衰の差はあっても時代と共に社会と共に流れてゆく。被服の流れを、先人の創造した生活の文化遺産から、祖先の生活の努力の跡に接しつつ服飾を根幹として考察致したい。

### 1. 原始の生活様式 縄文式文化

南北に長い日本列島に人類が生活をはじめたのは何時の頃であろうか。色々の推測が行われていたが、数万年以上の長期間続いた日本石器時代の最後の時期に約6,000～7,000年間栄えた文化で弥生式文化に先行する。当時作られた縄文式土器は表面に縄目の文様のついた土器が、その文化の特徴をよく表現しているために、縄文式（土器）文化と呼ばれ、この土器の様式の変化に基づいて縄文式文化は早期、前期、中期、後期、晩期の五期に分けられている。

(1) 縄文式土器の特徴 人類は、いろいろの縁の粘土が固く焼けるのを見て土器を工夫したのだといわれる。粘土の紐を巻きあげて形を作った後、器面を平らに均すという目的で細縄或いは燃糸を器面に転がしたため縄文がついたのである。これが次第に装飾化され貝殻や篋などで表面を均す方法もとられたから、必ずしも縄文がつけられるとは限っていない。ころがしてつける縄文は世界でも珍しい手法であって日本独特の文様だといつてよい。

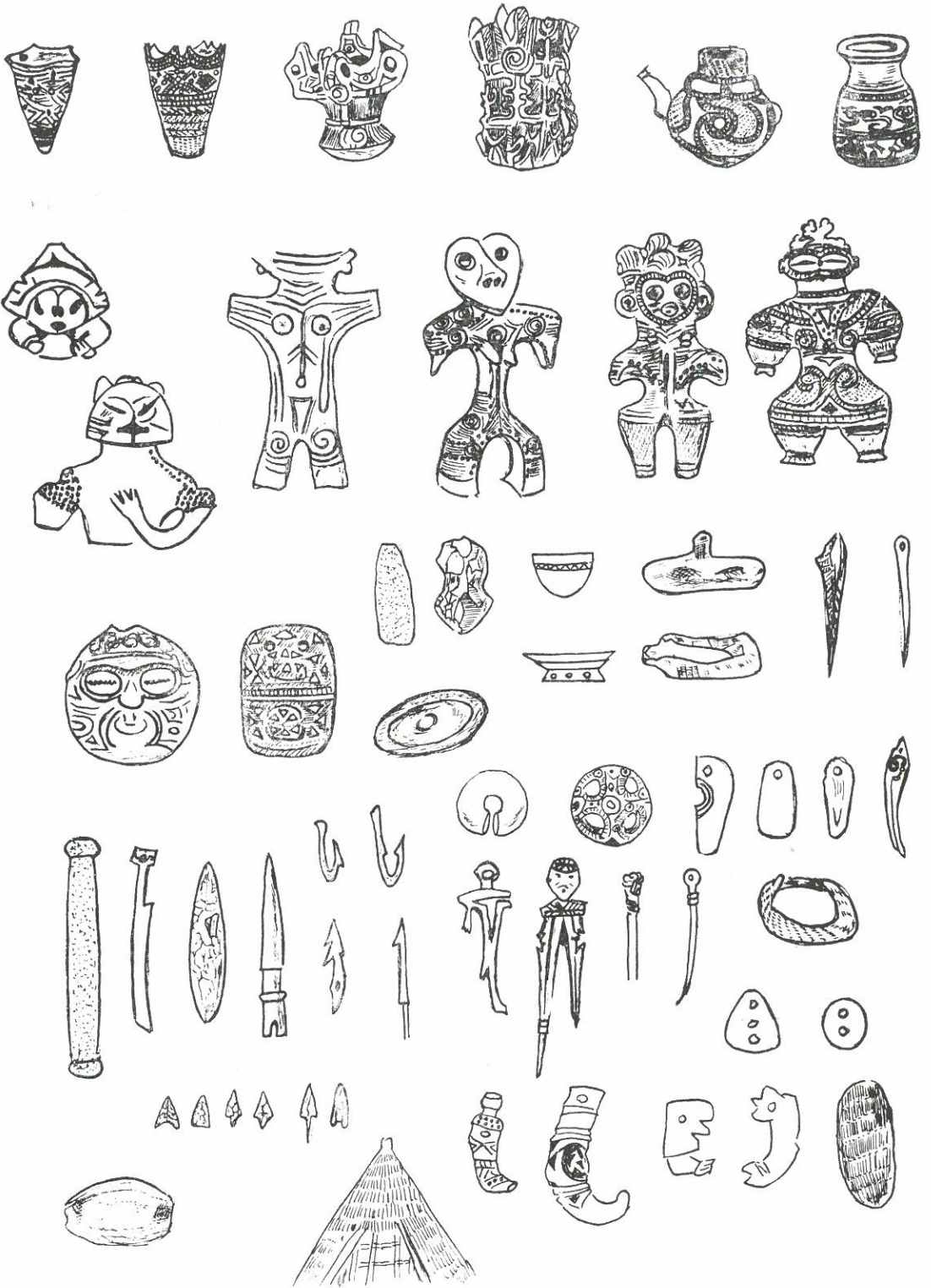
#### ① 文様の変化

早期 細縄や燃糸を転がした縄文は少く、燃糸を丸い棒に巻きつけて器面に押しつける様に転がした廻転絡縄文や、彫刻した丸い棒を転がした廻転押型文や、貝殻の腹縁で器面をかきとって条痕をつけたり篋で線をかいたり突いた点をならべた文様などがある。

前期 縄文が多く鳥の羽根に似た羽状縄文や、燃糸文、半分に割った竹の先を押しつけた爪形文、半截竹管文、櫛歯文などがある。

中期 紐状の粘土の帯をはりつけたり、透し彫りの手法をとつた彫刻的な文様が多くなり、中部地方以東に顕著で地域的な差が目だつ時期である。

後期 区割した中の縄文だけを残し、他の部分の縄文をすり消してしまう「搾り消し縄文」の手法が盛んにとられた。



# 原始の生活様式

## 縄文式土器

1	2	3	4	5	6
尖底深鉢 縄文早期 (田戸I式)	深鉢 縄文前期 (開山式)	裝飾付甕 縄文中期 (勝坂式)	甕 縄文中期 (加曾利E式)	注口土器 縄文後期 (加曾利B式)	壺 縄文晩期 (大洞B-B C式)
千葉県香取郡 小見川町出土 高 30 糎	千葉県柏市宇 小金出土 高 35 糎	東京都北多摩郡 国分寺出土 高 38 糎	長野県岡谷市 岡谷出土 高 58 糎	青森県十和田市 四和出土 高 21.5 糎	青森県西津軽郡 木造町出土 高 11.5 糎

## 土 偶

1	2	3	4	5	6
顔面把手 山梨県出土 高 10 糎	縄文中期 (勝坂式) 山梨八代郡 御坂町出土 高 25.6 糎	縄文中期 (長者ヶ原式) 新潟県糸魚川市 長者ヶ原出土 高 30 糎	縄文後期 (堀之内式) 群馬県吾妻郡 吾妻町郷原 高 31 糎	縄文後期 (安行II式) 埼玉県岩槻市 柏崎町出土 高 20.2 糎	縄文晩期 (大洞B-B C式) 青森県西津軽郡 木造町出土 高 34.8 糎

## 土 面

縄文晩期 (大洞B C-C I式) 青森県西津軽郡 木造町出土 高 11.4 糎
--

## 土 版

縄文晩期 (安行III式) 茨城県稲敷郡 東村福田貝塚出土 高 16.7 糎
--

## 日 用 器 具

1	2	3	4	5	6
磨製石斧	打製石斧	木鉢	みがき石	石錐	骨針
7 石皿	8 木杯	9 石匙			

## 漁 獵 具

1	2	3	4	5	6
石棒	石切	石槍	骨槍	骨釣針	骨釣針
				7	8
				骨釘	骨釘

石礫  
四種

骨礫  
二種

石おもり

縄文式中期  
堅穴住居を  
復原したもの  
東京武蔵野郷土館

## 装 身 具

1	2	3	4	5	6
石製耳飾	土製耳飾	扶状耳飾	硬玉大珠	有孔貝飾	骨製首飾
耳飾					

7  
髪飾り

8  
髪飾り

9  
貝飾

鹿角偶 縄文後期  
宮城県牡鹿郡稲井村  
出土 長さ 4~3.8糎

10 ボタン形館

11  
垂飾(角製)  
縄文晩期  
青森県西津軽郡  
木造町出土  
長さ 12.4~8 糎

12  
勾玉  
縄文後期  
岩手県二戸郡  
金田一村雨滝出土  
長さ 4.3 糎

13  
織物の圧痕  
縄文土器



晩期 曲線文様が退化して線描の直線文になり、一般に無文の土器が多くなるが、東北地方の亀ヶ岡式土器と呼ばれる一群は浮彫風の文様も考案されすぐれた数々の文様がみられる。

## ② 器体の変化

早期 巻きあげの手法による最も簡単な口が開いて底の尖った安定感のない尖底土器が多い。

前期 口が開いて底が平らになり浅い鉢が作られ、口縁部を波形に突起させることもなされた。

中期 円筒形の深鉢や浅鉢が主で、立体的な装飾と相まって豪華にして雄大な土器が多い。

後期 器形の変化が著しく台付の鉢や皿、注口土器が作られた。

晩期 多く香炉形の装飾的土器が見られる。

縄文式土器は細部については各地域により非常に複雑な変化がある。

(2) 土偶 縄文時代を代表する遺物である。土で作られ焼きかためた女性像が多い。早期末のを最古の例として中期以後数多く現われる形や装飾は土器の変遷に準じて動いていく。早期前期には、胴体に手と頭をつけた三角板状の平たい土偶が作られ、中期になると足がつき立てておけるようになり、後期晩期には各種の手法を駆使して精巧さを増している。必ずしも写実化えの道をたどったとはいえず、異様で怪奇ともみえる表現をとっているのが多い。用途は、子供の玩具・神像・装飾品・護身符・豊産を祈る女神像などといわれているが、容器形土偶と呼ばれる中空の土偶中に幼児の骨を收藏したり、大部分は破損して廃棄された状態で発見され故意に土偶を傷け負傷疾病などの災禍を転じようとしたものと見る説もあり、宗教的・呪術的な色彩が濃いと考えられている。

### ① 土面

一般に円形楕円形で扁平又は皿状にふくらみがある。土偶と同様呪術的護符的な意味をもつものと考えられる。

### ② 土版

土偶から発達したもので、関東地方の遺跡から発見され、山字文と人面のついたものが多い。用途は上方にある孔に紐を通して護符として携帯したと考えられている。やはり呪術的、護符的な信仰に関係あるものと思われる。中空のもので人面の口に孔があき、吹くと美しい音を発するので土笛ともいわれ楽器用としても使ったらしい。

(3) 生産活動と道具の変革 縄文人の生産活動は主として狩猟、漁撈、植物採集であり、大陸の新石器時代と違って、縄文人達は農業を全く知らず彼等の食料は大自然が与えてくれる木の実や草根、鳥獣、魚貝に限られていたと考えられる。細石器の流行をもって無土器時代が終わり、まもなく日本の石器時代は革命的な変化をとげ、磨製石斧、弓矢、丸木舟、釣針などの道具類が彼等の生活をより豊かなものにした。又石、貝殻、骨、角、木等も彼らの技術の及ぶ限り利用された。地方色豊かな縄文式土器、女性をかたどった土偶、護符のような土版その他装飾品が作られた。石を打ち欠き磨いたりして石斧、石棒、石剣、石小刀(石匕)、石鏃、石錐、石皿、敲石、装飾品等に利用された。貝殻や骨角は、釣針、銚、針、匙、装飾品として、又木は丸木舟、櫂、容器(鉢、杯など)、住居の柱や床等に用いられたし、獣や魚の皮革、樹皮、繊維、樹脂なども重要な資材となった。

(4) 住居と集落 縄文人は地表に皿状の浅い穴を掘り、その中に柱をたて地面まで屋根を葺きおろした竪穴式住居とよばれる家に住んでいた。この頃の住居についてよく穴居生活をした等といわれるが、洞窟や岩蔭を利用したことは稀で

早期の竪穴住居は四隅の丸い方形が多く細い柱を壁に沿って多く並べたもので、時に中央よせて太い柱四本建てた例もある。住居の内部には炉がなく、外部に離して炉穴を掘って火を燃や

した。この炉穴は長径約2本の楕円形をなし深さは1m内外底の一端が傾斜し、その奥壁から煙出しの細い穴が地上へ抜けているのが特徴である。

早期末から前期の初めにかけて台形の竪穴住居に2本の柱を建てる時期があった。

前期の半ば頃から終わりにかけては長方形、方形となり柱は4本又は5本中央近くに炉が設けられた。

中期になると円形の竪穴住居が多くなり中央の炉は石で囲まれたり、大きな土器を安置したりする例がふえた。東京都練馬区中村橋遺跡では竪穴の径が5~6mである。

中期末から後期の初めにかけては床面に川原石を敷き並べた敷石住居が残された。

後期晩期の住居についてはあまり良好な調査例がないけれど楕円形、長方形等が知られている。

しかし自然採集の生活をしてきたから、ある期間居住して獲物が少なくなると、又次の豊富な場所に居を移すということが繰返された。こうした数千年間にわたるこの時代の人びとは力強い生活力とたくましい創造力とをもって大自然と闘い不自由な生活を切り開いた底力が、野生的でどぎつい迄と感じられるかの縄文式土器を生み出したのであろう。

一つの集落について幾戸の住居があったのかは詳ではない。一遺跡から20戸或は30戸の住居跡が発見されたとしてもそれ等は同時に建てたとは限らない。色々な事情を総合してみると、一時点々と並んでいた住居数は、3~6戸多くて10戸を越える場合は稀であったと思われる。自然の与える食料だけに頼る縄文人達にとって絶えず冬の間でも50人以上の食料を確保する事は難かしかるかに違いない。江戸時代のアイヌの人々を参考にしても5万分の1の地形図一面(約400km<sup>2</sup>)の中に、100人が限度であったらう。従って縄文時代の総人口はおおよそ約10万人程度であったと思われる。

(5) 埋葬 北海道の斜里町朱円その他からは、円形の土塁をめぐらした内側に石を積み上げた墳墓が群集して発見されている。積石の下には人間を埋葬する穴が掘られ穴の底には石棒、石斧、平玉櫛、土偶等の副葬品が収められていた。北海道から本州の北東部にかけて発見される環状列石も、縄文式文化の後期に作られた墳墓ではないかと云われている。本州の縄文人は墳墓の目標を作らなかったが、死者を埋葬するため一定の区域はきめられていたらしい。埋葬姿勢には屈葬、伸展葬等が知られている。大阪府国府遺跡、愛知県吉胡遺跡等からは、数百体もの人骨が発見されている。死産児、乳幼児の死の場合は深鉢形の土器又は壺の上に鉢を蓋にかぶせた例も発見されている。

(6) 衣生活 衣食住の生活中人間と動物は、しばしば同じような事をしている。人間が住居を作ると同様鳥は営巣し、獣は仔を育てる為に安全な隠れ場を求める。動物が餌を求めて歩く事は原始的な生活においては人間も行なってきた姿で、自分で衣料を作り着用する衣生活は人間のみで動物にはない世界である。動物の毛皮や鳥の羽毛は護身という目的や美しさから時に吾々の衣服と同様に取られやすいが、決して自ら作ったものでもなければ、その意志で色や形を変える事も出来ないものである。人間とは自ら衣生活を営む動物ともいえ、人類が動物と異った人間の生活をはじめ厚い体毛を失った時、既に何らかの形で極めて素朴な衣生活が行なわれていた事であろう。わが国に人類が住みついた時にも勿論彼等は何か衣服らしいものを身につけていた事であろうが、今日これを実証する何らの資料も持たない。服飾の中心をなす衣料の実物資料が残っているはずもないし、先史原史時代の服飾に関連のあるものを求めると、石器時代の縄文期(紀元前3世紀~6,7世紀頃)に作られた土偶に行き当る。その表現は原始的で写実性が少なく服飾に関してどの程度現実の形を写しているか推定しにくい。縄文後期から晩期にかけての進んだ形には頭に冠よりの被りものを戴き、上下二部に分れた模様のある上衣とズボン風の衣服



をつけ、足には履物らしいものをはいていると云いたくなるようなもので許されるならば、北方系に属する服飾と飛躍して終いそうだが現在の段階では土偶による服飾の検討は不確として一応棄せざるを得ない。しかし世界は共通に近い文化の姿を示しているようであるから、日本の原始文化時代のきるものは世界的に相通ずるものがあると見てよい。人類が地球上に現われてから数万年の長年月の間は「裸」で過し、ヨーロッパの石器時代の終り頃腰廻りに獣皮・木皮・樹葉・鳥羽をめぐらした事は彼等のかき残した絵により推察出来る。旧石器文化研究の権威であるフランスのブリュエが色々の材料を根拠として描いた腰巻衣の絵がある。現在アフリカに住む原始文化人もこれに類する服装のものが少なくない。中にはアフリカのセネガアル土人の腰紐姿だけのものもある。南アジアのビルマ、セイロン等では今日でも腰巻衣ですごし古代エジプトでも国王、王后も腰巻衣姿で過した彫刻等で察する事が出来る。日本原始文化人も長期間「裸」時代を過した後、腰巻衣の時代もあったと推測され縄文時代は専らこの姿であったであろうとも云える。

**織物の存否**は、土器の表面や底面に付けられた布目の圧痕の有無により判定される。又遺跡から紡錘車や稀に織機の断片が発見される事によって知られる事もある。従来縄文時代にはアンペラ風な編物や籠編みのようなものはあっても、織物の存在ということは遺物の点からはっきりした証拠となるものがなかった。処が最近北部九州の縄文晩期の遺物から織物の圧痕を残した土器が多数発見され、少なくとも当時一部に織物の存在した事が実証された。しかし当時全般的には衣料は獣毛皮、魚皮等が用いられていたものと考えられる。

(7) **装身具** 装身具をつけて身を飾る事は三千年の昔も今も変りがない。米を作る事を知らない当時の人々は、捕えた獲物の残った骨や角、牙等を加工して装身具やその他利器を作った。

① **髪飾り** 鹿角偶宮城県牡鹿郡稲井村出土の髪飾りは鹿の角を彫刻したもので、右は人か猿のような顔をして額、胸、足には杉綾状の刻線を飾っている。窪んだ所に丹が残っているから全面に丹彩されていたものと思われる。これを出土した遺跡は縄文後期から晩期にかけての遺物が豊富で、骨角器・土器・土偶・石器等があり、晩期の骨角器は精巧で群を抜き重要美術品に指定されたものが多い。この時代の髪飾には髪針・笄・櫛等があるが、骨や角を串状にし彫刻を加えてヘアピンにし、骨に加工して鹿の頭部を飾りとしその足に当る部分を歯とした櫛や漆で固めた櫛もある。

② **垂飾** 青森県西津郡木造町出土の腰飾は鹿の角で作られ、頭には紐通しの穴があけられ先は勾玉状にそり返って中央に複雑な彫刻がしてある。晩期の埋葬された成年男子の腰あたりから発見されたので腰飾と考えられている。

③ **耳飾** 硬玉は美しい非常に硬い石で翡翠、瑯玕とも云われ珍重されている。この硬い石を磨き穴をあけ飾玉として既に縄文時代中期頃から使用している。技術の幼稚な時代に如何にしてこの硬い石を細工したか判らないが驚くべきことである。又中国の雲南、ビルマ方面は硬石の産地として知られ或は古代にこの方面と何等か交流があったのではないかと考えられたが、最近では北陸奥羽方面にも硬玉を産する所が発見され、日本内地の産物である事が分った。大型大珠は縄文中期の遺跡に小型勾玉形の玉は後期の遺跡に多い。この外土製の臼形耳飾がある。

④ **頸飾、腕輪** 動物や魚の歯、牙、骨、貝殻で小さな飾りを作り、これをつなぎ頸飾りにし、貝に穴をあけた腕輪もあった。

(8) **当岡山県における縄文式晩期の遺跡の状況** 岡山県で縄文式晩期に属する土器を出土している遺跡を列挙すれば次の通りである。(鎌木義昌氏による)

岡山県西大寺市清音	黒和貝塚
岡山県邑久郡牛窓町黄島	黄島貝塚

岡山県上道郡上道町沼	貝殻島貝塚
岡山県上道郡上道町竹原	下竹原貝塚
岡山県倉敷市粒江東粒江	船津原貝塚
岡山県児島郡福田町古城	古城貝塚
岡山県都窪郡吉備町大内田	宮後貝塚
岡山県玉島市八島	島地貝塚
岡山県玉島市黒崎	中津貝塚
岡山県笠岡市西大島	津雲貝壁
岡山県笠岡市高島	玉泊遺跡・黒土遺跡

その他多く数える遺跡は、大部分が貝塚遺跡である事から判断されるように、標高 10m 以下 4.5m の低地に立地し、付近一帯に広くやがて沖積化される又沖積化されつつある土地を望み営まれている。作州山間地方の縄文式遺跡自体確認されているものはなく、僅か 2, 3 の土地から土器一片に接する位で皆無に近いといわれ、縄文式晩期の遺跡は吉備の内海地方に広大な干潟を眼前に丘陵緩斜面乃至丘端麓上に展開させたのだろう。

その一つ津雲貝塚を挙げてみると大正 8, 9 年清野謙次博士が調査し注目された遺跡は、貝層中及び下部黒土層中から百数十体の埋葬人骨が発見されその埋葬形式から曲葬や抜歯の風習を習わず様式が判り、埋葬後に焚火した跡もあり土器や石鏃・石斧の石製品や角製釣針も出土し、人骨と付随した貝輪・耳飾等の装飾品も見出された。

#### (9) 縄文人とは — 結語にかえて —

縄文人は吾々の遠い祖先である。かつては縄文人はアイヌであるとかコロポックルであるとか議論されたが、考古学、人類学上の研究から見て現代日本人の祖先であるという説が強く、無土器時代と縄文人との関係は詳ではないが縄文人・弥生人・古墳人・歴史時代以後の日本人は連続して発展を続けてきた一民族であると考えられる。縄文文化の範囲は南樺太から薩南諸島迄の分布圏で大陸から殆んど隔離された独特の縄文文化を築き上げたのであろう。高橋健自博士の原始的服飾原始衣は、縄文時代は「裸」で「腰巻衣」の自然採集経済生活から、農耕社会の栽培経済に入った弥生式文化時代に民衆衣としての原初形態であったのだろう。これについては次回にゆ

— 未完 —

#### 参 考 文 献

1. 佐良山古墳郡の研究 津山市
2. 国民百科事典 平凡社
3. 日本服飾美術展 東京国立博物館
4. 図説日本人の歴史 藤 直幹編
5. 土器とはにわ 村井崑雄著
6. 岡山県の文化財
7. 衣服の歴史 後藤守一著